

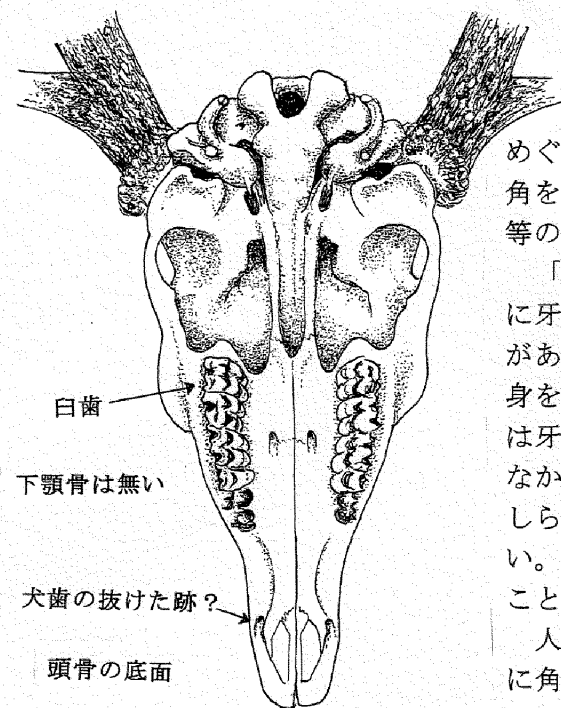
探 検 磨 播

2021. 1. 25
302号
元文赤松弘一

赤松頭骨コレクション No4
Akamatsu skull collection

ニホンジカ (シカ科)
学名 *Cervus nippon*

頭骨
最大長さ 28cm
最大幅 12cm
角の長さ 45cm



この冬、幾度も里山の公園や河川敷を訪れたが、心トキメク発見や出会いはなかった。私の感性が錆びついてしまったらしい。外出を避けて家の掃除や片付けをするような前向きな過ごし方にも疑問を持ち、絵を描くことにした。さりとてネタもないので、車庫に眠っている骨格標本の中から、まだ絵に描いていない鹿の頭骨を描くことにした。これまで幾度も「動物のからだ」単元の授業で活用してきたものだ。リビングの床に骨を置いて各部の長さを計測し、スケッチする。一見異様な光景だが家人からの批判的な提言は特にない。食卓の皿の中にチキンの骨があっても平気なのだからこれは当然であるといえる。

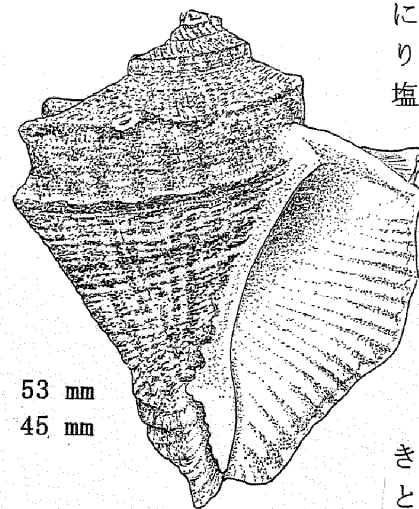
この頭骨は魚住東中学校勤務時代の2003年?に、2年生?のF.Y子さん?が持ってきてくれたものである。「お爺さんが、山崎?の山の中で見つけた」と聞いた記憶があるが、今となっては「?」が多い。角の特徴から4歳以上の雄と考えられる。角は4歳ぐらいまでは毎年生え変わるたびに枝分かれが増えるので年齢を推定できるのだ。だが立派な角も春には取れてしまう(落角)。その後、夏にかけて袋角が伸びてくる。表面は皮膚に覆われ、中には血液が流れている。この中で骨質の角ができるのだ。秋には袋が破れて硬い角が現れる。繁殖期を迎えた雄は雌をめぐって激しく角で争うのだ。しかしせっかく生えた角をなぜ毎年落としてしまうのだろうか。ヤギやウシ等のウシ科の動物の角は生涯生え変わらないのだが。

「角のあるシカなどには牙がなく、イノシシのように牙のあるものには角がない」という話を聞いたことがある。角は繁殖期の雄の強さの象徴であるが、他に身を守る武器という働きもあるだろう。角のない動物は牙で身を守る。「馬にはどちらのものもないぞ!」というなかれ。雄馬には小さいが牙(犬歯)があるのだ。「わしらもどっちもないで!」とウサギが言うかもしれない。しかしながら理科教師は少しも慌てず「そういうこともある」と窓の外を見ながら答えるのだ。

人間は角を持たず、小さな牙(犬歯)を持つが、たまに角を生やす場合があるらしい。

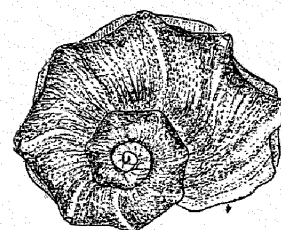
加古川河口探検 ～シロニシ～ 「巻貝はなぜぐるぐる巻くのか？」

1月11日、姫路市の海岸で打ち上げられたナマコを7匹収穫した。その7日後、今度は加古川河口を訪れた。20年前にはサルボウガイやハマグリが獲れたが、洪水で砂浜の状態が変わり、最近は何も獲れない。浜には腐った植物が泥のようになって堆積している。川沿いの葦などの植物が流れに運ばれ、腐って細かく砕かれたものだ。長い年月で泥炭など

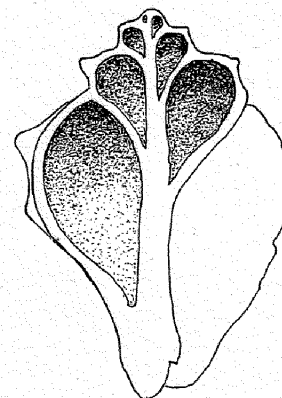


殻高 53 mm
殻径 45 mm

シロニシ 白螺 (アッキガイ科)
学名 *Rapana rapiformis*



波に磨かれて突起
が摩耗している



縦切りにした断面

に変わっていくのだろう。水際には牡蠣の殻が堆積しており、その中にツメタガイやニシガイの殻があった。以前大塩の浜でニシガイを収穫したことがあった。これは殻口がオレンジ色のアカニシであったが、加古川河口で見つけたニシガイは殻口が白く、シロニシであると思われる。図鑑によればシロニシは紀伊半島以南台湾に分布となっているが、温暖化の影響か、北の海域でも見られるようだ。サザエは海藻を食べる草食性だが、同じ巻貝でもニシガイはアサリやカキなどの貝や、死んだ魚などを食べる肉食性である

大塩の浜で獲ったアカニシは刺身や煮付けにして食べたが、図鑑で調べると、この貝の唾液腺にはテトラミンという毒があるらしい。頭痛や吐き気、めまいに襲われるという。(知らずに食ったが、何ともなかった...)

巻貝の螺旋がどのようにになっているかを確認しようと思い、鉄パイプなどを切断する金鋸(この)で縦に切ってみた。半時間ほどで見事に切れて断面を見ることができた。殻の内側は奥まで白く、シロニシであることを確信した。

軟体動物である貝類は、柔らかい体を石灰質の硬い殻に入れて身を守っている。2枚の盾(たて)状の殻の中に身体を入れたアサリなどの二枚貝派と、ニシガイなどの巻貝派に分かれる。巻貝では殻が巻かずに直線だと機能面でも強度面でも困る。殻を螺旋状に密着させればそれを解決できる。また殻が螺旋状になったことで様々な造形美を生み出す。この螺旋のぐるぐる造形美に魅せられる人間がいる。

何を隠そう、私は小学生時代に巻貝の収集にハマっていた。近くの海岸で拾ったツメタガイやイボニシなどの雑多な貝の他、オーム貝やテングガイ、ホネガイなど南洋の希少な貝はお年玉で購入した。魚屋で買ったアカニシやバイ貝なども食後に殻を標本にした。大切にしていたオーム貝は昭和59年の兵庫県南西部の山崎断層地震の時に本棚から落ちて壊れてしまったが、他のコレクションはまだ実家にある。今も海のある地方へ旅すると、波打ち際をうつむいてトボトボ歩く。寂しさを演出して旅に詩的な彩りを添えるためではなく、貝などの漂着物を探しているのだ。この習性は小学生時代に身に付いたのである。